

天候不順に伴う水稲に関する当面の技術対策」

北海道農政部
平成 13年 8月 17日

1 病害虫防除

稔実籾においても低温障害などのため、割籾の多発や登熟期間が長引くことが予測されるのでカメムシの防除を徹底する。

不順な天候下で生育した稲体は、ケイ酸含有率が低くなることから、病害虫の被害を受けやすく、褐変穂・いもち病などが多発する恐れがあるので、発生予察を徹底し適期防除に努める。

2 水管理

十分な登熟を確保するためには適切な水管理が必要であるので、穂揃い後 25 日目(穂かがみ期)まで十分な水分供給を行う。

不稔が多発した場合は、通常より3～7日程度登熟が早まるが、登熟が不揃いとなることから、籾の熟度を良く観察したうえで落水期を決定する。

また、収穫期における適期刈取を可能にするほ場条件を確保するため、落水後は速やかに溝切りなどを行い表面水を排除し、ほ場の早期硬化に努める。

< 参考 >

【青刈り稲の堆肥化における留意事項】

需給調整による青刈り稲の堆肥化については、青刈り稲の窒素含有率が、1.5%(対乾物)前後、炭素率(C/N)が 27 程度なので、堆肥化に際して C/N の調節は不要であるが、発酵を促進するため種堆肥の混和が有効である。

また、過水分の場合は発酵が遅れるので、堆肥舎などに堆積し、水分を 70%程度(糊熟期の青刈り稲はほぼこの水分)に調整する。

なお、10～20cm 長に細断すると発酵菌が侵入しやすくなり堆肥化が早まる。